# 嘉納治五郎と東灘

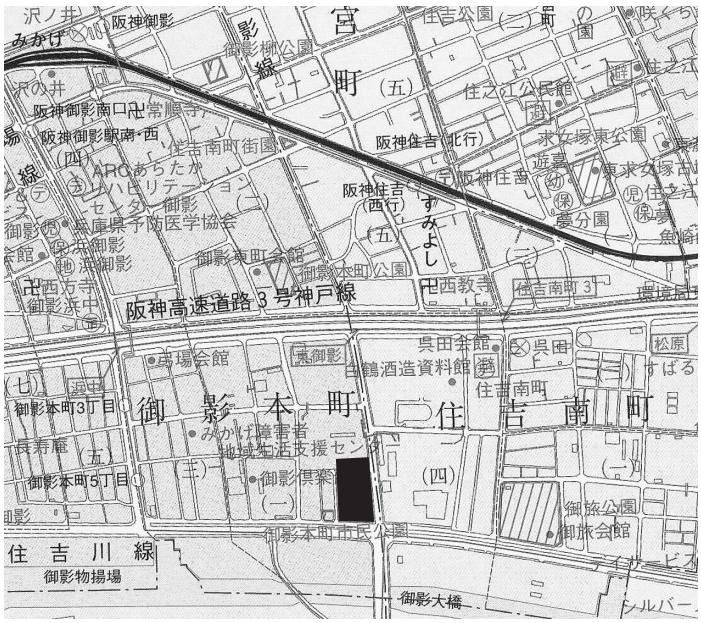
史料館副館長　道谷　卓

## はじめに

来年（二〇一九年）のＮＨＫ大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺（ばなし）～」は、日本がはじめてオリンピックに参加した一九一二年のストックホルム大会から、一九六四年の東京大会開催までの五二年間を描く作品だ。その中でドラマ前半の主人公・金栗四三（かなくりしそう）の恩師として役所広司さんが演ずる人物が嘉納治五郎である。嘉納治五郎は、講道館柔道の創設者であり、「柔道の父」とも言われ、柔道を志す者であれば世界のどこに行っても通用する日本人と言っても過言でない。また、日本のオリンピック初参加に尽力し、近代日本のスポーツの礎を築いた人物として「日本の体育の父」とも呼ばれている。

この嘉納治五郎が、東灘区御影の出身で、この地域の近代教育の基礎を築いたことを知る人はそれほど多くない。そこで、本稿で、嘉納治五郎の生涯と東灘とのつながりを、特に教育の点を中心に述べてみたいと思う。

地図１　嘉納治五郎生誕の地（「阪神沿道地籍図（西部）」1920年発行より）
（地図１、２の黒塗りが浜東嘉納家の邸宅・千帆閣の場所）




地図２　「東灘区あんない」東灘区役所発行より



生活文化史№46④.indd　4　2018/05/21　8:27:38

## 一、御影生まれの嘉納治五郎

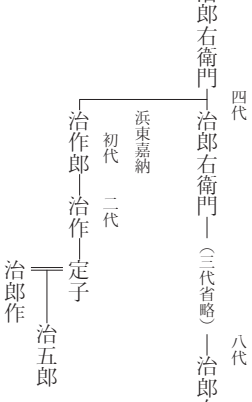
嘉納治五郎は、一八六〇（万治元）年十月二十八日、摂津国菟原郡御影村浜東（はまひがし）（兵庫県武庫郡御影町御影字浜東〈現在の神戸市東灘区御影本町一丁目〉）で、父・治郎作、母・定子の三男（第五子）として誕生する（地図1、2参照）。幼名を伸之助と言った。治五郎の生家、嘉納家は、浜東嘉納家と言い、酒造業や廻船業を営み、菊正宗で知られる本嘉納家とは縁戚関係にあった（系図参照）。

治五郎が育った浜東の家は御影の浜に面しており、屋敷から紀淡海峡を航行する帆船の帆影が青畳の上に映ったとことから「千帆一目」の邸宅と言われ、「千帆閣」とも称された（この邸宅は、祖父・治作が建てた）。そして、治五郎は、この浜東の邸宅で誕生から一〇歳までの幼少期を過ごすことになる。[1] 一八六三（文久三）年、治五郎が四歳の時、軍艦奉行の勝海舟による和田岬と西宮の砲台築造に父・治郎作が協力することになり、海舟は千帆閣を訪れ、幼い日の治五郎と出会っている。また、一八六五（慶応元）年、治五郎六歳の時には、摂海防備視察に来た老中・小笠原長行が千帆閣を訪れ、治五郎は、もみじのような手を行儀良く膝の上に置き老中に謁見したと言われている。

幼少期の治五郎は、父が仕事で多忙のためほとんど留守にしていたこともあって、家では、母・定子と過ごしていた。しかし、多忙な父であったが、治五郎の教育には熱心で、一八六六（慶応二）年七歳の時から儒者の山本竹雲に、習字と経書の素読を習わせた。このような教えを受け、治五郎は、八歳の時（一八六七年）に、字を拾い集めて二冊の小さな本を作り、その一冊を『天憙章』と名付けたが、これは、『大学』の天下の「天」と、「朱憙章句」の一部をあわせたものだという。

幼少期の御影時代、そのほとんどを母と生活していた治五郎は、のちに一九〇二（明治三十五）年頃の手記に「母ガ常ニ他人ノ為ニ自分ヲ忘レテ尽スコトデアル。誰ニカウシテ遣ルトカ彼ニカウシテ遣ラウトカ、誰ガ気ノ毒デアルトカ、ヨク心配シテ居ッタコトヲ覚エテ居ル」と母の思い出を書いており、他人のために尽くすことを母が教えてくれたと述懐している。この母の教えが、教育者として大成する治五郎の基礎を築いたことは言うまでもない。この母も治五郎が一〇歳の時、一八六九（明治二）年に病気で亡くなり、これを契機に治五郎は生地を離れ、父に連れられ東京での生活を送ることになる。

**（系図）**




## 二、嘉納治五郎の生涯

治五郎は、母の死去を契機に、父に連れられ居を東京に移したが、本節では、東京転居後の治五郎について、まとめておくことにする。[2] 東京に転居した治五郎は、育英義塾に入り英語やドイツ語を学び、東京帝国大学の前身・官立開成学校に入学したのち、同校が東京帝国大学と改称されたことで文学部に編入、一八八一（明治十四）年、治五郎二二歳の時、東京帝国大学文学部政治学・理財学を卒業（文学士）した。

治五郎は、育英義塾に通っていた頃から、自身の身体が虚弱だったことにコンプレックスを感じていたので、非力な者でも強者を負かすことの出来る柔術にあこがれを持ち、学びたいと思っていたが、父の反対にあったためうまくいかなかった。治五郎はあきらめきれず、一八



生活文化史№46④.indd　5　2018/05/21　8:27:38

歳の時（一八七七〈明治十〉年）、天神真揚流（平服で行う）福田八之助に入門し柔術を学ぶことになり、その後、起倒流（鎧着用で行う）の柔術を学ぶに至った。治五郎はこの柔術の二流派をもとに改良を重ね、東大卒業の年、「柔道」を確立した。そして、一八八二（明治十五）年、下谷北稲荷町一六（現・台東区東上野五丁目）の永昌寺に、「講道館」を創設したのであった。

治五郎は、講道館を拠点に、柔道を広めていくわけであるが、その理念となった言葉が彼によって考え出された「精力善用　自他共栄」である。「精力善用」は心身の持つすべての力を最大限に生かして、社会のために善い方向に用いると言う理念で、「自他共栄」は柔道を通して得た相手に対し敬い感謝することで信頼し合い助け合う心を育み自分だけでなく他人と共に栄えある世の中にしようという理念で、この二つは治五郎の進むべき道を示したものといえる。

また、治五郎は教育者としても顕著な功績を残している。講道館を創設した一八八二年に、学習院の講師となり政治学の教鞭をとったことが教育者としての第一歩であり、一八八六（明治十九）年には教頭に昇任している。その後、一八九一（明治二十四）年に文部省参事官兼第五高等中学校校長となり、単身熊本に赴任する。そして、一八九三（明治二十六）年には東京高等師範学校（後の東京教育大学、現在の筑波大学）の校長に就任し、治五郎は、同校の校長を三期計二三年余りの長きに渡って務めることになる。この間、治五郎は、中等教員養成のカリキュラムの策定に大きく関わり、そのモデルを構築していった。

さらに、治五郎は、「日本体育の父」と呼ばれるように、柔道をその基盤に置きながら、日本の近代スポーツにも多大なる貢献をしている。ところで、柔道が世界に知られるようになったのはどうしてか。それは、治五郎が熊本の五高校長のとき、ラフカディオ・ハーン、すなわち小泉八雲を英語教師として招聘したことがきっかけである。八雲は、治五郎の柔道に興味を持ち、そのことを著書『東の国から』（一八九五年、"Out of the East"）に書き記し、この本を通して欧米に柔道が紹介されたのであった。この柔道の世界進出は、治五郎を、世界の舞台へと送り出すきっかけを作っていく。それは、近代オリンピックの創設者・クーベルタン男爵からの要請で、一九〇九（明治四十二）年、東洋初の国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）の委員に就任するという形で実現する。そして、これを契機に、一九一二（大正元）年ストックホルムオリンピックに日本は初めて参加し、治五郎は日本選手団団長になった。その後、治五郎は、存命中に開催されたほとんどのオリンピック大会に臨席している。[3] この間、治五郎は、一九一一（明治四十四）年大日本体育協会を設立し、初代の会長に就任している。また、治五郎はＩＯＣ委員として精力を傾けたことが、オリンピックの東京開催であり、それは一九三六年（昭和十一）のＩＯＣ総会で、一九四〇年の東京オリンピック（戦争激化で中止）招致の成功へとつながるのであった。

このように、教育者、「柔道の父」、「日本体育の父」として活躍した治五郎であったが、一九三八（昭和十三）五月四日、カイロでのＩＯＣ総会からの帰国途上の氷川丸の船中で肺炎を発症して帰らぬ人となった（享年七九歳）。

### 三、嘉納治五郎と東灘とのかかわり

普段は東京に住まいを構える治五郎であったが、生まれ故郷の御影をはじめ東灘から神戸市全域に範囲を広げてみると、旅行や出張と称して、頻繁にこの地を訪れていることがわかる。[4] とりわけ、治五郎の本家筋にあたる菊正宗の本嘉納八代目・嘉納治郎右衛門は同世代であったことから、親交があつく、しばしば、御影の治郎右衛門の邸宅を訪れている。

実は、この治五郎の治郎右衛門宅への訪問がきっかけで、御影を文



生活文化史№46④.indd　6　2018/05/21　8:27:39

教の地へと発展させる基礎を築いた組織が考案されている。[5] それは、「御影教育義会」という組織で、一八九二（明治二十五）年三月二十七日に設立されている。治郎右衛門をはじめ地元の有志は、かねてから、御影町に教育を普及させるためにはどうすべきかを熟慮していた。同年二月二十六日に、文部省参事官であった治五郎が治郎右衛門を訪問した際に、治郎右衛門たちは治五郎を囲んで懇話会を開き、教育普及のためにどうすべきかを相談し、治五郎はその場で自らの教育理念を語り、普及のための組織を作るべきであると語った。これにより設立されたのが「御影教育義会」であり、いわば、この組織は、治五郎発案の組織であった。この会は、御影町教育の普及をはかることを目的とし、尋常小学校やそこに通う児童への援助を行い、町民には講演会を開催して教育の重要性を説いていった。この会が行ったことの中で特筆すべきは、治五郎の助言のもと、幼児教育の重要性にかんがみ幼稚園を設立したことである。これが、一八九二（明治二十五）年に開園した御影幼稚園で、開設当初は御影教育義会が運営した私立の幼稚園としてスタートし、五年後の一八九七（明治三十）年に町立に移管している。今、御影地域には、この御影幼稚園をはじめ、御影小学校、御影中学校、御影高校が半径三〇〇㍍の円内に立地し、「文教の地」を形成しているというその源流は、この御影教育義会にあると言えよう。

また、治五郎は、東灘に彼の教育理念を実現するための学校の設立に参画している。今や全国的にその名が知られている「灘中学校・灘高等学校」である。灘中学校は、灘五郷の酒造家である菊正宗の本嘉納家、白鶴の白嘉納家、桜正宗の山邑家の三家の篤志を受けて設立された。そのきっかけは、本嘉納の治郎右衛門が奉公人の人材育成を行いたいという思いと、治五郎が治郎右衛門へ語ったこれからの日本を支える人材を作る学校を作りたいという理想がマッチしたことである。さらに、桜正宗代表で元魚崎町長の山邑太三郎が、官公立学校の欠点を補い特色を有する私立学校の設置を熱望、魚崎町の町有地を校地として無償提供するよう町長に申し入れた。[6] こうした酒造家の思いと治五郎の教育への思いが開花し、灘中学校設立へと動いていった。治五郎は、一九二七（昭和二）年十月八日、御影で、両嘉納家や山邑家など関係者と灘中学校の設立にむけ協議をしている。そして、同年十月二十四日、旧制灘中学校の設立認可がおり、翌年四月からの開校が決まった。

初代校長には、治五郎が愛弟子の眞田範衛を招聘した。眞田は学校の「教育の方針」を定め、自ら校歌・生徒歌も作詞した。また、治五郎自身も学校の顧問となり、校是には自ら柔道の精神として唱えた「精力善用　自他共栄」を採り入れた。そして、一九二八（昭和三）年四月一日、旧制灘中学校が開校、治五郎は開校・入学式に参列している。その後、治五郎は、同校の入学式、卒業式には必ず列席している。

このほか、治五郎は、灘中学校はもとより、御影師範学校や魚崎小学校など、地元の学校などで柔道、教育、体育を題材に数多くの講演を実施している。

## おわりに

嘉納治五郎を顕彰しようと、地元では、御影公会堂のリニューアル（二〇一七年四月）にあわせ、その地下に「嘉納治五郎記念コーナー」を設置した。治五郎関係の資料を展示するとともに、その中央には、柔道着姿の等身大の治五郎の銅像が置かれている（写真1）。また、灘中学校の校庭にも治五郎の紋付袴姿の銅像が立っている（写真2）。[7]

地元ではこれまで、嘉納治五郎について、それほど関心を示してこなかった。彼の生誕の地がどこかを知る人もほとんどいないであろう。来年の大河ドラマを契機に、嘉納治五郎という人物について、地元の人々が少しでも興味を示してくれることを期待したい。



生活文化史№46④.indd　7　2018/05/21　8:27:39

（註）

（1）幼少期・御影時代の治五郎については、『嘉納治五郎体系　第一三巻　年譜』（一九八八年、講道館監修）を参照した。

（2）本節における治五郎の系譜については、『気概と行動の教育者　嘉納治五郎』（二〇一一年、生誕一五〇周年記念出版委員会編、筑波大学出版会発行）を参照した。

（3）一九三二（昭和七）年のロサンゼルス五輪で、治五郎とともに、後に深江で深山医院を開業する深山杲が、日本水泳選手団のチームドクターとして随行していることは興味深い。

（4）治五郎の動静は、前掲（1）の『年譜』のほか、『講道館百三十年沿革史』（二〇一二年、講道館発行）付録のCD版に収録されている「年表編」から把握することができる。

（5）この組織の設立の経緯については、『武庫郡誌』（一九二一年、武庫郡教育会編）四七五頁以下を参照。

（6）灘中学校設立の経緯については、『魚崎町誌』（一九五七年、魚崎町誌編纂委員会）五七九頁以下を参照。

（7）なお、嘉納治五郎の銅像は、この東灘区内の二基を含め、国内に五基ある。残りの三基は、東京都の筑波大学附属小学校占春園と講道館、茨城県の筑波大学。

写真１　御影公会堂の嘉納治五郎記念コーナーに設置された嘉納治五郎の銅像

写真２　灘中学校・高等学校内・嘉納治五郎の銅像



生活文化史№46④.indd　8　2018/05/21　8:27:39